

素材採取家の 異世界旅行記

MATERIAL COLLECTOR'S ANOTHER WORLD TRAVELS

10



木乃子増緒

KINOKO MASUO

モモタ

コタロの弟。
かわいい。とにかく
かわいい。

ビー

タケルの相棒の
子ドラゴン。
タケルとカニが
大好き。

タケル

ひょんなことから
異世界で「素材採取家」
となった本作の主人公。
食べることに
お風呂が大好き。

コタロ

犬獣人の王子様。
岩をも砕く
強力な爪を持つ。

主な登場人物

クレイストン

顔が怖い
ドラゴニートの戦士。
本気の戦闘時は
魔主化する。

フロライト

見た目は絶世の美女だが、
中身はおっさんという
残念エルフ。

謎の精霊

手のひらサイズの
精霊さん。
ちょっとうざい。

ヘスタス

お調子者の鋼鉄イモムシ。
一応、リザードマンに
とっての英雄。



＋　＋　＋　＋　＋

パンは好きだが白飯も好き。炊き込みご飯はもつと好き。米とおかずを一度に食えるって最高じゃね？　烏釜飯とりかまじうまいよね。

そんなわけで皆さんこんにちは、素材採取家のタケルです。

北の大陸。パゴニ・サマクに住む魔族まぞくに目を付けられ、強引に拉致らちされました。笑えない。

どうにも俺が持つ膨大な魔力ぼうだいを利用しようと拉致したらしいんだが、大人しくハイどうぞ、なんて言うことを聞いてあげる俺ではありませんことよ。

あれだけ便利に使っていた魔法が使えない。というのも、パゴニ・サマクは魔素がとても薄い大陸だったのだ。

魔法を使えなくはないのだが、無理に使えば気絶という代償を払うことになる。

俺が使う魔法はやたらと燃費が悪いことが判明。優しい魔族ハヴェルマたちに魔法の使い方を教わり、せいそいっと省エネ魔法の使い方をマスター。やればできる俺。知ってた。

愉快ゆかいなイモムシ電池でんちことリザードマンの英雄ヘスタスを相棒に、鋭い爪で俺の頭皮をいじめてくれる生臭い仔竜のビーが傍そばにいない現実寂しさを募つらせつつも、なんとか生きています。

生きようと思えばどこまでも食欲に生きられるのが人間だ。木の枝を、調理してみりゃゴボウだよ。さすがトンデモマデウス。

調味料と食材があればもっとうまいもんが食えるのにと、泣く泣くごぼうサラダで腹を満たす日々。朝夕お通じばっちり。

俺の内臓事情はともかくだ。

ハヴェルマと相反する魔族、ゾルダヌの王城に連れてこられた俺は、ゾルダヌの王である通称魔王に喧嘩を売りました。俺の魔力を吸うのが目的という魔王から、魔力発生装置扱いされたのに、怒るなっていうほうが無理でしょう。

魔王との対面後、俺は王城から抜け出すためにあちこちブチ壊し、俺に寝床を提供してくれた優しいゾルダヌの第二女様、ルキウス殿下を逆に拉致。何を言っているのかわからないだろう。俺も勢いといえ何をしたんだかと思うよ。

だが、俺が考えていた以上にハヴェルマとゾルダヌの対立は酷くて。

パゴニ・サマクの魔素が薄い問題もわからないまま。

そうした混乱の最中、豆柴に酷似した犬獣人の始祖であるコポルタ族が仲間になった。可愛い。

ビーがいない寂しさを彼らもふもふ軍団で癒されつつ、さてどうやって王城から脱出しようかと企み……目論み……算段しているところです。

はてさてどっせ、俺の運命や如何に？

1 魔石の山を頂戴いたす

コポルタ族の傷を一通り治療した俺は、ヘスタスを頭に乗せたまま魔石を吟味していた。

鋼鉄のイモムシにしか見えないヘスタスは、例のごとく不思議な精霊さん、という設定にした。

しかも、ヘスタスは俺の守護精霊だとか言いやがったのだ。貧乏神の間違いじゃないの。

魔石坑から発掘された魔石は種類が豊富で、魔素そのものを閉じ込めた後天魔石をはじめ、いろいろとあるらしい。また普通の鉄鉱石や銀鉱石、時々イルドラ石も発掘されているようだ。

だがドワーフたちが喜びそうな鉱石類はクズ石として処理され、ここでは魔石以外はゴミ同然の扱いになっていた。

ゾルダヌの連中、ドワーフにも喧嘩を売るつもりか。

鍛冶職人のゲルサス親方がこの場にいたら、怒髪天で怒鳴り散らしていただろう。

「タケル、これはでけえぞ」

「でけえけど、魔素量はこっこのほうが多い」

「それじゃあ、これはどうだ」

「お。いいね、これ。小さいし軽いけど、魔素量が多い。はいこれよろしく」

「お任せを！ わんっ」

「わんわんっ」

可愛い。

どう見ても豆柴にしか見えない彼らは、それでも立派な成人男性。つぶらな瞳と小さな鼻、赤茶色の毛にくるりん尻尾。二足歩行で手先を器用に使っているが、見た目だけならば小型の柴犬と遜色ないのだ。

顔がにやけてとろけないよう引き締め、俺はヘスタスと小さい魔石を選びつつ、選んだ魔石をコボルタ族に手渡ししていた。コボルタ族はそれぞれ協力し合い、バケツリレーならぬ魔石リレーで魔石を保管庫の外へ。

ここはゾルダヌの王城のはるか地下。コボルタ族が強制収容され、魔石を掘るために使役されていたサピュル魔石坑——という名前でした。

その坑道内には特殊な魔法が施された扉があり、中には採掘されたばかりの新鮮な魔石がごろごろ保管されていた。そんな物を放置するなんて考えは、俺には毛頭なくて。

もともとはコボルタ族が採掘した物だ。彼らが使って何が悪い。土地はゾルダヌの物？ 知ったことか。労働に見合う対価を支払っていないのだから、この魔石の所有権はコボルタ族にある。

魔石は彼らが使う微々たる魔法の糧。

彼らコボルタ族は、良識ある一部のゾルダヌらから魔法の扱い方を教わり、水を生み出す魔法を

使えていた。

だが、飲み水は魔法で出せるだろうからって、水の配給すらなかったんだって。ほんともう、あの王の角をひつつかんでぐるんぐるんにブン回してお空の彼方に飛ばしてやりたい。

食べる物といえば、坑道内にあるわずかなコケや植物。たまに謎の虫肉団子。うへえ。

ここ何年もともに食べていないのだから。

よし。

雑炊粥だな。

作りましょう。

腹いっぱいでもう食えないってギブアップするまで食わせてやろう。

みんなで協力して使えそうな魔石をすべて坑道の巨大なホールに集めると、ちょっとした魔石の山になった。

「タケルさん、この魔石をどうするのですか？」

コボルタ族の執政官レオポルンが集められた魔石を眺め、不安そうに問う。

そりやいただくに決まっているでしょう。

城内にはたたくさんの魔石があったからな。この山の一つくらいなくなっても、ゾルダヌたちはしばらく暮らせるはずだ。今すぐに死ぬほどのこっちゃない。不便にはなるだろうが。

これだけの魔石があれば転移門が難なく作れる。転移門の先はコタロの服に忍ばせた地点石。王

宮内を逃げるついでに装飾用の魔石を失敬し、魔力を込めて地点石へと変化させておいたのだ。

どれだけ離れていても、地点さえあれば転移門で逃げられる。逃げる先をトルミ村に設定しても良かったんだが、さすがに大陸間を越えるとなると今ある魔石だけでは魔力が足りない。

本当はこの魔石の山を使ってビーの魔力を探知したかったが、いろいろ考えてやめておいた。ビーたちが常に移動をしているとしたら、見つけにくいのだ。クレイたちがいつまでも一か所に滞在していると思わない。

俺が拉致されたろ？

ビーが騒ぐだろ？

プニさんが供物がどうのと愚痴るだろ？

クレイとプロライトが飯のことを心配するだろ？

それじゃ捜そうかね、となるはずだ。

お願いそうであって頼むから。

俺はヘスタスと吟味した魔石の山を前にし、大きく腕を回して深呼吸。

「まずは、この坑道内にいつでも戻ってこられるよう、地点確保——固定」

魔石を一つ手に取り、魔力を込めてから地面に埋める。

コボルタ族たちは俺の一手一投足に集中。何百という柴犬軍団に見つめられると、ちよつと緊張する。

「続いて坑道の入り口に蓋をする」

あの王の魔力がどれほどのものか知らないが、絶対に破壊できないような結界を作ってやる。

何よりも、コボルタたちの安全。

王が俺の取引……かなり一方的ではあるが、ルキウス殿下の身柄が惜しくばコボルタ族を解放せよ、という強迫にどう返答するかが問題。

十中八九どころか、百パー「そんなの好きにしろ」だろうな。きつと殿下を返さなければコボルタ族を犠牲にするだろう。あの王のことだ、一人ずつ公開処刑とか言い出すかもしれない。とんでもない。

殿下は俺に「王を助けてくれ」とは言わなかった。ゾルダヌというくりの中に入れられていたかもしれないが、もし王も助けてほしいのならそう言うだろう。

だが、言わなかった。

ということだ。

殿下は王に対しては諦めもあるのではないかな。殿下は何度もコボルタ族の処遇改善を訴えていたが、聞き入れてもらえなかったんだ。さぞ悔しかっただろう。

話を聞いてくれない親って最低だよな。あと、価値観を押しつけてくるやつ。問答無用で従えって感じの上司とか。主義主張を言う前に冷静になってみるってんだ。

ともあれ、もしも俺の言い分が聞き入れられなかった場合、コボルタ族を人質にされるわけには

いけない。

「ふーっ、絶対に破られない壁。誰の介入も許さない魔法。俺だけが解除できて、俺だけが破壊できる、そんな結界……そうだ、障壁！」

俺が放った魔法は、坑道の入り口にビタツと張り付いた。透明だけどわずかに虹色に輝く、絶対障壁。

結界と違うところは、形を変えることができないうえ、決められた場所から動かせない。

だがしかし、どれだけ強い魔法をブチ当てても破れない。ぶつけられた魔力を吸収し、更に強固な壁となるよう願いを込めた。

東の大陸グラン・リオの守護神である古代竜ボルさんくらいの力があれば、爪の先でばきよっと壊せるだろうが、この障壁はビーにも破れないだろう。

合同村での古代狼、オーゼリフ戦の時、この魔法を思いついていればなあ……

いくら魔力が強かろうと、魔法を思いつかなければ意味がない。

「タケル、タケル、これすげえ！ ものつすげえ！」

興奮して障壁に頭からブチ当たるヘスタスは、障壁の威力を肌で感じているようだ。攻撃すると、魔力を吸われるぞ。

「よし、これでゾルダヌたちは坑道内部に入ることができない。新たに魔石を仕入れることが難しくなる」

俺が障壁を撫でながら言うと、コボルタたちは一斉に拍手。肉球のぼふぼふ聞こえる拍手が和む。「もしもゾルダヌたちがここに来て、この壁を開けると言っても知らんぷりしてください。聞こえな！ って耳を塞いでくださいね」

「わかりました！」

「聞こえないふり！」

「ぼく得意だよ！」

「あたしもできるよ！」

おおう、おおう、俺の足元で仔犬軍団が喜び跳ねる跳ねる。

魔石の山からいくつか手ごろな魔石を失敬して、次なる準備。

「レオボルンさん、俺は少しの間ここから離れます。ゾルダヌの王にコボルタ族の解放を求めます」腰を落としてコボルタ族と同じ目線にしてそう告げると、彼らは不安そうに怯え出した。

「王様はおつかないよ」

「絶対に敵わないの」

「ゾルダヌで一番魔力が強いんだ」

どれだけの恐怖を味わわれたのか。ゾルダヌの王イコール恐怖の対象なんだな。怯える彼らを安心させるように、俺は平然と微笑んで見せる。

「大丈夫。俺は、とっても頑丈だから！」

偉そうに言えることじゃないが、事実だ。

「俺はすぐに戻ります。俺が戻ったら移動できるよう、荷物をまとめておいてください」

「タケル殿、貴方様はどうして我々にこうまで優しくしてくださるのか……」

無条件の優しさを長年享受^{きやうじゆ}できないでいたコポルタ族は、嬉しさ半分戸惑い^{とまど}半分といったところだろうか。

彼らに優しくする意味？

見た目が可愛いから。

いやもちろんそれだけではないぞ。彼らは純粋な心を持った、優しい種族であることは間違いない。そういった種族が理不尽な圧力に屈してはならないのだ。

それに、彼らは犬獣人の原種。つまりは、現在アルツェリオ王国内に住む幾万という犬獣人たちのご先祖様。そんな貴重な種族を無駄死になんてさせてたまるか。

ベルカイムにだって知り合いの犬獣人がたくさんいる。彼らは俺の良き冒険者仲間であり、ギルド職員。彼らの悲しみは俺の悲しみ、なんて大層なことと言わないけれど。

コタロという可愛い王子を知ってしまった俺には、無視することができない。

「コタロが俺に頼んだんだ」

「兄さまが？　なんて頼んだの？」

コタロの弟、コポルタ族第二十九番目の王子であるモモタ。

彼はすっかりと打ち解けてくれて、今も俺の膝^{ひざ}の上に乗ろうとしてくる。こいつめー。

「コタロは美味い飯をモモタに食わせてやりたいんだって」

「うまいめし？　おいしいごはん？」

「ああ、皆にもだ。今まで食ったことのない、美味い飯を腹いっぱい^{かな}に食わせてやりたい。そんな彼の願いを、俺は叶えたい」

薄暗い坑道内では、夢を見ることしかできなかっただろう。いや、夢すら見ることさえ叶わなかったかもしれない。

コタロはルキウス殿下の傍で安穩^{あんゐん}と暮らしていたわけではない。ゾルダヌらに怯え、坑道内に種族ごと人質に取られ、心細い思いをしていたはず。

そんなコタロが願った。ささやかな夢。

「うううっ……コタロ殿下」

「なんてお優しい……」

「きゅーん……」

だから俺は飯を作ってやる。

腹が減っている奴に美味い飯を。

ここから出よう。太陽の光の下、みんなで温かい飯を食おう。

「俺がここから出てしばらくすると、ゾルダヌたちがやってくるかもしれない。その時みんなはど

うする？」

「知らないって言います！」

「きこえないー！」

「よし。ゾルダヌたちはこの壁を壊そうと躍起になる。その時は怖いかもしれないが、この壁は絶対に壊れない。だから、しばらく我慢してほしい」

「わん！」

「わんわん！」

「俺がここに戻ってきたら、この魔石の山ごと外に出る」

柴犬軍団がどうやって？ というキョトン顔で俺を見つめてきた。

今はそれを説明するよりも、行動あるのみ。

「ヘスタス、お前は王の傍に行かないほうがいい。ここに残って、魔石の山から魔素を吸っている」

「俺も一発殴ってやりてえんだけど」

「後にしなさい。転移門を繋げられる余裕が俺にあったら、地下墳墓からお前の本体を持ってきてやるよ」

「本当だな！ 絶対だぞ！ 俺の本来の姿で、あのクソ王をブチ殺してやる！」
怖いな。

せめて半分殺すくらいにしておきなさい。

あの王を殺せば話は早いだろう。

だが、その後はどうする？ 王を殺したということで今度は俺たちが復讐の対象になる。ゾルダヌたちは俺たちを目の敵にし、俺が救おうとしているコボルタ族やハヴェルマ、ルキウス殿下にもその刃を向けるだろう。

そうになったら種族間戦争に発展してしまう。いやもう遅いかもしれないが。

今のところ王の標的は俺だけ。俺がすべてを巻き込んだことにすればいい。後はクレイとかグラント卿とか、政治に詳しそうな人に相談しよう。

ゾルダヌを滅ぼしたいわけじゃないんだ。

ただ、ハヴェルマとコボルタ、嘆く彼らに美味しい飯を食ってもらいたいだけ。腹が膨れりゃ良い考えも出てくるだろう。

俺はヘスタスをレオポルン執政官に預け、転移門を開いた。

＋　＋　＋　＋　＋

「ルキウスはどこへ行ったのだ！」

城内に炸裂する王の怒号。

弾け飛ぶ美しき天井。焼ける調度品。

ゾルダヌでも随一の魔力を誇る王が、謁見の間において無頼者に軽視された。

無頼者はオグル族の末裔。高い上背と闇のような黒い髪をし、膨大な魔力を身に秘めし神の贄。

王は焦った。

まさかただの一種族が、己の魔力をも圧倒する魔法の使い手であったとは。

目をくらませる閃光。耳をつんざく爆音。たったそれだけの魔法で、ゾルダヌらは蜘蛛の子を散らすように慌てた。

全世界で我らが唯一の絶対種族。魔力の扱いに長けた、誇り高き一族であるというのに。

王は焦った。

一族を救うためと民に言い聞かせ、溢れる魔力を己だけのものとし、己に従う者のみに庇護を与えた。

だがそれがどうだ。みすみす神の贄を取り逃し、絢爛たる城内を破壊された。

「陛下！ 第二王女殿下は城壁を破り、西へと逃亡された模様」

「王女殿下の親衛隊長他数名の行方がわかりません！」

「守護の魔石も紛失しております！」

慌てふためく配下の者たちを前に苛立ちを隠そうとせず、王は握りしめた拳を玉座に叩きつけた。

大柄な王の身体を支える強固なはずの玉座は、激しい音を立てて跡形もなく粉碎された。

途端に喧騒が静まり返り、辺りは恐怖に支配される。

王の思い通りにならぬことなど、決してあってはならぬのだ。この大陸を支配する秀でた種であるゾルダヌが、一介のオグルの末裔に翻弄されるなどと。

「神の贄を捜せ！ 彼奴の魔力をすべて奪え！」

再び王の怒号が響き渡ると、配下の者たちは血相を変えて再び動き出す。

我らが尊き王の怒りを浴びてはたまらぬと。

＋　＋　＋　＋　＋

ゾルダヌの城には魔素が溢れていた。

城の外に魔素が出ないよう、なんらかの魔道具が壁に埋め込まれているのだろう。室内はほどよい室温なのに、窓を開けて顔だけを外に出せば、カラッカラの乾いた風。

わずかな魔素すら外に逃すまいとするように、ゾルダヌたちの必死の足掻きが見える。

広大な庭の向こう、高い堀に囲まれたその向こう、ゾルダヌたちが暮らす街があるのだろう。ここからは遠すぎてよく見えないが、きつと綺麗な街並みなんだろうな。

そんなわけでこちらタケル。城の地下にある魔石坑にコポルタ族をひとまず待機させ、俺一人

こつそりこそこそ城内を散策しています。

いや、決して観光気分ではない。天井の細工が見事だなとか、アルツェリオ王国の王城とも趣が違ふなとか、ここにもまっばふるちん裸族男の肖像を見つけた、なんて。

仕方ないじゃないか。そもそも俺は旅行を趣味としていたんだ。いろんな国のいろんな世界遺産を見て回ったし、豪華絢爛な城や教会なんかに興味があった。どれも思うことは「掃除するの大変だな」くらいだけでも。

魔石坑以外にもコポルタ族はいないか搜索したが、探査の魔法には引つかからなかった。やはりルキウス殿下の言った通り、コポルタ族では、次期王位継承者でもあるコタロだけが城内に留まることを許されていたのだろう。

それはきつと、コタロが人質だからだ。

コタロの身を盾に、コポルタ族たちに強制労働をさせていた。王様の野郎、怪我をしたコポルタ族たちを放置するなんて、なんて非道なんだ。ふるふる震えるコタロの弟を思い出し、俺の口がへの字にひん曲がる。

唯一コタロやコポルタ族たちが救われたことといえば、ルキウス殿下と出会えたこと。

傍若無人で殷勤無礼なゾルダヌたちに囲まれながら、よくもまあルキウス殿下は真つすぐに育つてくれた。他種族であるのにもかかわらず、俺の拉致を嘆き、素直に詫びてくれた。そんな俺もルキウス殿下との出会いには感謝をしないと。

「さてさて、もいっちょ……探査」

心を落ち着かせ、淡い光を腹の底でこねるように。

四方に巡らせた薄い魔力の枝が、一瞬で城全体を包み込む。

これだけの魔力を展開させたら王様に見つかりそうだが、それはそれ。念には念を入れて、警戒する。

もしも強力な魔石が残っていたとしたら、ゾルダヌらが転移魔法などを使って追いかけてくるかもしれないからな。

探査先生は優秀だから、俺にそういったことを教えてくれる。少なくとも今の段階で強い魔力を発する魔道具や魔石は存在しない、と。よしよし。

「ん？」

小走りで廊下を突き進むと、下へ下りる階段へとぶつかる。

窓の外には枯れた庭が見えるから、ここは一階。コポルタ族たちが閉じ込められていた魔石坑に通じる階段は、この場所とは真逆の西棟にある。

それじゃあ、更に下へと下りるこの階段はなんだろうな。

「ビー、警戒して……」

ああ、また呼んでしまった。

俺の頭皮をいじめてくれる、あの生臭い漆黒の童が恋しい。ビーと離れて何日になるのだろうか。

この大陸に連れてこられてからしよっちゅう意識を失っているから、今日で何日になるのかわからない。少なくとも六日以上は経過しているような気がする。

絶対に会えるから、不安になることはない。

俺は今できることを全力ですればいいだけ。

嘆く暇があるのなら、じゃがバター醬油をどうやったらこの大陸でも食えるのか考えろ。

食うことは生きること。俺は食うために生きている。次に風呂。

「あ。ゾルダヌの風呂を確認するの忘れた」

そろりそろりと階段を下りながら、そんなことを口にしてしまう。ここにクレイがいたら確実に脳天叩かれていた。

慌てて口を両手で押さえつつ、足を進める。

臙脂色の毛足の長い絨毯が敷かれた階段を、なるべく音を立てずに下りていくと。

そこには薄暗い廊下。明かりの魔道具が機能しているのかしていないのか、等間隔に並んだランプはどれも光が抑えられていた。

今まで豪華で派手な城内だと思っていたのに、この空間だけが異質。まるで何かを隔離しているような、地下牢でもあるのかなという雰囲気。

だが、薄暗い廊下が続くだけ。左右の壁には扉がない。いや、肖像画が飾られている。

どれもこれも立派な写実画であり、歴代の王族の姿らしき絵だった。

ここは王族ミュージアム？

高い天井のぎりぎりにまで届く巨大な肖像画は、黄金に輝く額縁に収められている。描かれている人物は誰もが頭に角が生え、その角を邪魔しないような意匠の冠を被っていた。

ヒゲもじやな爺さん、品の良さそうな婆さん、中には幼い美少年の肖像画も。

「……ん？」

肖像画が飾られていた廊下を進むと、妙なことに気づく。

初めのほうの肖像画は老齢の人物ばかりだったのに、先に進むにつれて若い人物を描いた肖像画が多くなっている。

どうしてだろうかと近くに寄って絵を眺めると、額縁に文字が掘られていた。マデウス共通言語であるカルフェ語ではなく、魔族が独自に使っている文字だろうか。どっちにしろ俺は異能のおかげでどんな文字でも読めるけど。

「ジョルリアーナ、メテス、グリマイト……享年五十二歳」

金髪碧眼の幼い美少年は、享年五十二歳でした。

魔族は長命種であり、ゆっくと歳を取る。エルフ族やハイエルフ族と同じで、見た目が成人した頃に身体の成長が止まる。数百年を経てやっとこさ老化が始まり、天命を迎えるまで三百年足らずなのじゃとプロライトが教えてくれた。

ごく一般的な人間の常識しか持ち合わせていない俺にとって、エルフ族たちの長命は実感が湧か

ない。プロライトだってあの見た目で七十過ぎ。中身は十歳くらいだが。

長命種の五十二歳なんて、まだまだ子供だろう。この肖像画の人物のように。

グリマイトって、確かあのぶちぎれ魔王の名前もグリマイトって言っていたな。あっちの絵の人物も同じく……グリマイトだ。

だとしたら、やはりこの少年は王族。もしかしたらずっと昔の王様だったのかもしれない。

五十二歳美少年の左隣に飾られている肖像画は四枚。美少年の次に、美少女が描かれている。こちらの人物は享年五十四歳。その隣の肖像画には享年四十八歳の文字。

「若くして亡くなっている……」

肖像画の人物は大体が五十歳前後で亡くなっているようだ。いや、その傾向が表れたのは、さっきのジョルリアーナ少年の絵が始まり。

ということだ。なんらかの理由があつて王族が短命になったということか？ 五十歳前後で亡

くなる、魔族特有の奇病？

はたして病気ののだろうか。

ジョルリアーナ少年の前に飾られていた肖像画の人物は、ヒゲもじやのご高齢なお爺様。フィラム・サンヴェリウム・グリマイトさん。なんと五百八十二歳。少なくとも、この爺様までの王族は五百歳以上生きている。享年と書かれていないということは、まだご存命なのだろう。

それでは、どうしてジョルリアーナ少年を含めた四人の王族は若くして亡くなっているのか。

そして、現在の王様。カルシアン・デイトニクス・グリマイト。美少年、美少女、幼児、幼女、と続いてのおっさん。

あの王様は確実に俺よりも歳上だよな？ 見た目的に言えば三十代後半。ということはだ、エルフ族的見た目年齢予想が合致するのならば、現王はおそらく二百歳超え。

最後の肖像画の人物は、享年二十七歳。見た目は完全に幼児。

それなのに現在の王様は順調に歳を取っているよな。王様はもともと王族ではなかったとか？ いや、あれだけ血統やらに面倒くさくこだわっているゾルダヌだ。王族でない人物が王位を継ぐことなどないだろう。

俺が一人で悶々^{もんもん}と考えていても答えは出ない。

ルキウス殿下に聞くのが一番か。ハヴェルマの長老であるポトス爺さんも何か知っているかもしれない。

いずれにしてもこの城には強い魔力を秘めた物は残っていないようだし、もしも残っていたとしてもいまだいた魔石でなんとか防御してみせる。

「よし、戻るか」

俺は意識を集中させ、目の前に転移^{ゲイト}門を作り出す。

目指すはコボルタ族たちの救出と移動。ルキウス殿下たちと合流し、そこからゼンダムたちハヴェルマの集落を目指そう。

俺が見つけた肖像画の数々。

それがまさか、魔族たち全員の存亡に関わっていたなんて。

腹の虫をぐーすか鳴り響かせる俺は、気づけるわけがありませんでした。

2 再会の時

時間に余裕があれば魔族の総本山であろう立派な城の見学を続けたのだが、玉座のある方角から爆音が鳴り続けている。

魔王様、自分の王城ブチ壊しているんじゃないだろうか。

威厳がある王は王として立派だろう。だがしかし、短気なのは宜しくない。周りの意見を冷静に聞く姿勢って大切。自分の考えだけで突っ走ると、結果がどうであれ周りが迷惑するんだから。今の俺がまさにそれ。だがしかし、コボルタ族の迫害を放置したくない。

そんなわけで、どっかんぽっこん鳴り響く最中、魔王の暴れっぷりを考えると当初考えていたように交渉に持ち込むのは無理だろうなと感じる。

俺が今、魔王の前に行くだろ？ 第二王女を返してほしくば、コボルタ族を解放せよ！ と、言ったとしよう。はい。うるせえこの野郎ふざけんなよおしコラぶちくらわしてやんど、と怒鳴ら

れるに違いない。おお怖い。

魔王が冷静にならないと交渉なんかできないだろうな。そもそもあのおっさん、冷静になれるのだろうか。

俺がやったことといえば。

第二王女拉致したろ？ コボルタ族も拉致しただろ？ 魔石抗を封鎖しただろ？

うん。更に怒るだろうな。

この王城に残る魔素がどのくらいあるのかわからない。魔王の本気魔法ビーム的なものを放たれたとして、不安定な魔素の中、確実に防げる自信はないからなあ。

「さて」

転移門の先は、コボルタ族が集められている魔石抗。

淡い光が放たれる水面のような門に顔を突っ込むと、遠巻きながらも興味津々で転移門を眺めるコボルタ族たち。なにあれ可愛い。

転移門の存在はバゴニ・サマクの民らに知られていないのだろうか。

俺たち蒼黒の団の拠点がある、東の大陸グラン・リオの最北に位置する辺境のトルミ村。あそこの雑貨屋の店主ジェロムすら、転移門の存在は知っていた。ジェロムが元冒険者だからかもしれないが、冒険者の知識として転移門という魔法はあるわけで。

だが、ゼングムたちハヴェルマでは転移門を失われた禁忌の術だと言っていた。何故禁忌なのだ

ろう。他の場所にあつという間に移動できる、ものすごく便利な魔法なんだけどな。

「おうタケル！ 何してやがった！」

ぴょんぴょこ跳ねながら近寄ってきたヘスタスは、転移門からぬるりと出てきた俺に怒鳴る。

「王城内に強い力のある魔道具が残っていたら厄介だろう？ ちょっと探索していた」

歴代の魔王ライブラリーを堪能したことは黙しておく。

「そうか。そういうところは抜かりねえな、お前。こっちは変わりねえぞ。魔法の壁を越えられる奴はいなかった」

それは良かった。もしかしたら魔王の全力魔法なら障壁を消すことができるかもしれない。こんな場所からはとっととおさらばしよう。

「タケルさん、タケルさん、今のが転移門でしょう？」

「わんわんっ、綺麗に光ってる！」

「すごいね、どこから出てきたの？」

俺の背後で揺らめいていた転移門を消すと、数人のコボルタ族が近寄ってくる。まだ怯えている様子はあがるが、好奇心のほうが勝っているようだ。

壁際で警戒を続けるコボルタ族たちもいたが、尻尾がふりふり揺れてますよ。

はてさて、ルキウス殿下の居場所を探さないと。拠点となる魔石は持たせているから、後は探査先生にお願いして……

——よし、見つけた。

動きはないようだから、王城から飛翔で吹き飛ばしたせいで気絶しているのかもしれない。ちょろちょろ動かれるよりはいいが、それはそれで心配だ。

「みんなー忘れ物ないか」

コボルタ族たちに声をかけると、彼らは一斉に起立。

「はい！」

「持つていくものなんてないもの！」

「どこでもいいから、ここから出たいよ！」

「わんわんっ、お日様が見たい！」

「うーっ、わんわんっ」

まだまだ腹は減って動けないはずなのに、彼らは必死に声を上げる。

たくさん仲間で犠牲になっただろう。それでも生きようとする彼らは、こんなところで拘束され強制労働させられるような種族ではない。

犬獣人の原種である、コボルタ族。彼らのことは穴掘りが得意な可愛い種族、としか認識していない。だが獣人というのは総じて誇り高い。懸命に生きながらえてくれた彼らの力を、思いきり発揮させられる環境があればいいのだけれど。

「タケル、無事に脱出できたら飯を食わせてやろうぜ。木の枝」

「ゴボウって言いなさい、ゴボウって」

俺の肩に乗ってきたヘスタスを確認し、腹で魔力を練る。

ゆっくりゆっくりと、魔石から魔力をいただいて。

最小限の力で、最大限の威力が発揮できるように。

コボルタ族ごと、魔石ごと。

ルキウス殿下のもとへ。

魔石抗の壁に転移門を展開させると、それを一気に拡大。

転移門は強い光を放ちながら、その場にいた全員を包み込んだ。

あつという間にルキウス殿下が飛ばされてきた場所に到着。なんとそこは、俺が北の大陸に来て最初に彷徨^{さまよ}っていた黒い木が生い茂^{おほ}る森だった。

眩^{まは}い光と共に大量のコボルタ族と、失敬してきた大量の魔石。そして、俺とヘスタス。

途方に暮れるルキウス殿下たちの目の前に俺たちが現れたわけだから、初めは沈黙が続いてしまった。

気絶していたわけではなく休んでいたらしいルキウス殿下が目をまんまるにし、口をばくばくとさせて。

殿下の護衛の騎士たちも、突然の出来事に呆^{ぼう}けるしかなくて。

「にいさま！ にいさまああー！」

尻尾をふりふり、大木の根元を掘っていたコタロの姿を見つけたモモタが叫ぶと――

「モモタ、息災^{そくさい}で何よりだ！」

「ぼつ、ぼぐわあ、がんつ、がんばつだったのでえずううつ」

「わんわんつ、わかつておる！ 幼い身ながらよう生き残ってくれた！」

「わあああああんつ、にいいさまああつ！」

まるで止まっていた時が一気に動き出したかのように、それぞれ安堵^{あんど}の息を吐き出した。

兄弟の再会は感動もので、コボルタ族の誰しもが号泣している。

ルキウス殿下の侍女さんたちは、流れ続ける涙をエプロンで拭いていた。

「にいさま！ にいさま！」

「頑張ったな、よう頑張った」

モモタは涙と鼻水とヨダレにまみれた顔で泣きじゃくり、尻尾はちぎれんばかりに振られている。ちっちゃいわんこがちっちゃいわんこを抱きしめ、転げ回って歓喜。

周りのわんこたちも飛び跳ねながら笑い、わんわんくんくん言っている。

ここが豆柴天国か。

「レオポルン殿、よくぞ無事で……」

「ルキウス殿下こそ、ご健勝で何よりでございます。コタロ殿下をお守りくださり、ありがとうございます」

ざいました」

「いいや、我なぞ何もしていない。我にはなんの力もないのだ」

「いいえ、いいえ、ルキウス殿下の庇護下になればこそ、コタロ殿下はあのようにご立派な姿を我らに見せてくださいました」

「顔を上げてくれレオポルン殿。お主らが無事で良かった」

「ううう……なんとお優しいお言葉……」

膝をついたルキウス殿下に、涙を流すレオポルン執政官。

ルキウス殿下と共に（俺に）飛ばされた侍女や騎士たちも、笑顔で涙を流していた。

俺は、種族の問題とか、国交問題とか、そんなことは一切考えなかった。

俺は俺の正義の下、勝手に動いただけ。その結果、ゾルダヌたちが滅亡することとなったらどうしようかとも思うが、一両日中に滅ぶというわけでもないだろう。王城にはまだまだたくさん魔石が装飾品として飾られていたからな。

ゾルダヌたちだけではない。ハヴェルマの民らにとつても、魔素は命そのもの。このまま魔素が薄れていけば、真綿でゆつくりと首を絞められるような生き地獄が待っているのだろう。

しかし、そうならないように考えることはできる。

「さてと、ある程度の魔石があることだし」

大量にくすねてきた魔石ではあるが、大きさはバラバラで含む魔素の量もまちまちだ。

こうして地面に放置している間にも、魔石から魔素は流れ出てしまっている。流れ出た魔素は大気に消え、魔素を必要としている動植物らが吸い込むのだ。数日も経てば魔石はただの石コロになるだろう。

「ルキウス殿下、教えてほしいことがあるんだ」

大量の毛玉……じゃない、コポルタ族たちに埋もれたルキウス殿下に声をかけると、ルキウス殿下も綺麗な顔をぐしゃぐしゃにして泣いていた。美人は豪快に泣いても美人です。

「殿下、これを」

侍女のアルテに白い布を差し出され、ルキウス殿下は恥ずかしそうに受け取って鼻をかんだ。

「ぐすつ、ずびつ……タケル、お前には感謝してもしきれぬ。我が種族の恥であるのに、我にはどうすることもできなかった。父王を恐れ、立場を恐れ、苦しむコポルタ族らに手をさし伸べることできなんだ」

深々と頭を下げたルキウス殿下に続き、騎士や侍女たちも同じく頭を下げた。

「ありがとう、タケル。ありがとう」

「いやいや、感謝されても困るというか、俺だって勝手にコポルタ族を連れてきたわけだし、ルキウス殿下だって俺に拉致られたわけだし」

「いいや！ 我は己の意思で王城から逃げ出したのだ！」

「拉致などと、とんでもない！ タケル殿は殿下をお救いくださったのです！」

「左様でございます！ タケル殿の勇氣ある行いに我ら一同感謝をしております！」

ルキウス殿下に続き、騎士らが声を上げる。

侍女たちも深く頷き、その通りだと肯定した。

だがしかし、その感謝の言葉を真つ向から否定するイモムシがここに。

「オイオイオイオイッ！ まだなんも解決してねえのに、頭を下げんじやねえよ！ あの魔王のことだ。魔石を盗まれて今頃プチ切れてやがるぞ！ 取り返すためにはなんだってしやがるだろうさ！ 今にもこの場に飛んでくるかもしれねえんだ！」

俺の頭のとっぺんで跳ね飛ぶヘスタスが叫ぶと、一同静寂。あれだけ笑い声に包まれていたコポルタ族たちが、絶望顔で俺を見ている。

ルキウス殿下も白い顔をより青白くさせ、恐怖を思い出したかのよう。

「ヘスタス……もつと言葉を選べよ」

「ああん？ 何生つちろいこと言つてやがんだタケル。魔素はないまま、薄気味悪い森にいるんだぞ俺たちは。まずはここから移動して、ゼングムたちと合流することを考えろ」

「考えてたつて。というか、俺の考えそのまま言っただけだろう」

「うるせえ。俺にもいい恰好させろ」

感動の余韻なんて後にしろと言わんばかりに、ヘスタスは続けた。

「おうつ、それで、どうすんだタケル」

結局は俺かよ。

「ここは見晴らしが良すぎて落ち着かない。ハヴェルマたちが暮らしている山の麓に移動して、それからこの先のことを考えよう。ポトス爺さんたちが何か知恵を貸してくれるかもしれない」

見ず知らずの怪しげな俺を受け入れてくれた彼らのことだ。きつと話を聞いてくれるはず。

「ポトス爺……？ ポトス爺と申す者は、ハヴェルマなのか？」

俺は頷くが、ルキウス殿下はまるで心当たりがないように首を傾げる。

ポトス爺さんは自分のことをハヴェルマたちの長だと言っていた。ゼングムや他のハヴェルマの民たちもポトス爺さんを慕っていたのだが、ルキウス殿下とは面識がないのだろうか。

何はともあれ。

怯えながらも新天地に興奮を隠せないコポルタ族の集団と、彼らを率いるのは己だとばかりに鼻息荒くやる気を見せるルキウス殿下に、俺は再度声をかける。

「ルキウス殿下、教えてほしいことがあるんだ」

空に花は咲かせられるかな。

3 怒りの矛先

北の大陸。パゴニ・サマク。

俺が今いるこの大陸に気絶したまま連れてこられ、目覚めて初めて目にしたあの巨大活火山。

火山雲に覆われた頂は姿を隠したまま、その雄大な全容を見せてはくれない。

あの山には神様がいらっしゃるらしい。魔族が信仰する、炎の神様——炎神。

馬の神様だって緑のバケモ……精霊王だって存在するマデウスだ。きっと炎神もただの信仰の対象というだけではなく、実際に存在する神様なのだろう。

炎を司るといえばサラマンダーとかイフリートを連想させるが、暴走して我を忘れた古代狼のようなおぞましい姿だとしたら困るな。言葉が通じなかったらどうしよう。もう巨大ナメクジや巨大イソギンチャクとは戦いたくない。

まあ、その時はその時だ。早いとこ消えそうな魔素を戻せと言うしかない。魔素が薄くなった原因は、絶対に神様だろうからな。

俺の異能力よ、頼りにしてるぞ！

ひゅ~~~~るるる……ぼすつ。

曇天に弾ける煙。

俺が想像していた花火は、これではない。

日々空を飛んでハヴェルマの民が住む集落周辺を巡回しているゼングムに、俺たちがここにいることを知らせなくてはならない。

だから一発花火でもぶち上げて、派手に主張してみようかと思ったのだが。

「違うぞタケル。もっと集中しろ！」

「痛っ！ 集中してるって！」

ヘスタスに脳天を叩かれ、再度なけなしの魔力を練る。

ルキウス殿下に教えてもらった花火は、いわゆる照明弾。騎士団が合図を送る時に使う魔法らしい。

大きな音と派手な火花が散るイメージを強く持ったのだが、魔素が薄すぎるこの地で打ち上げ花火など無謀。

大量にくすねてきた魔石の中でも、一番小さな石を拝借した。小指の爪ほどの大きさの魔石でも、魔素はしっかりと含まれている。

その小石を利用して照明弾を作るのだが。

「ええと、腹の中で火種^{ひだね}をこねて、そいそいつと……」

教えてもらった魔法を集中して作り出し、いざ空へと両手^{かか}を掲げる！

ひゅるるるる……ぼすつ。

なんだあの気の抜けた照明弾は。眩^{まぶ}しくもないし、音も微^{かす}かだ。

俺が考えていた花火は尺玉^{しゃくたまたま}だぞこの野郎。ズドンとドガンと腹に響く、あの真夏の夜空を輝かせる大輪^{たいりん}の花。

「やはり我らが魔法を使って……」

「それは絶対にやめてください。ルキウス殿下たちの……その、魔石が、この魔素のない場所ですんなり反応を示すかわからないんだ」

言葉を濁すようにルキウス殿下の胸に埋め込まれた魔石を見ると、ルキウス殿下は顔を曇らせてしまった。

魔法の扱いに長けたゾルダヌが魔法を使えない、使ってはならないというのは、屈辱^{くつじやく}なのだろう。騎士や侍女たちも悔しそうに俯^{うつむ}いている。

できないことはできない。できないのならばできるように努力する。それでいいんじゃないかと俺は思う。社会人たるもの、そうやってコツコツと経験を積み重ねていくのだ。継続は力なりと

いったもので、できなかったことができる瞬間が必ず来る。

ゼングムたちハヴェルマは王都を追放されても、めげずに前向きに生きていた。

なんだか滑稽^{こっけい}だよな。追放された魔族が生き延びていて、王都に残った魔族たちが滅びようとしているなんて。滅びに拍車^{はくしゃ}をかけたのは俺だけども。

「すまない、タケル。王都の外がこのような枯れた地になっていたことすら、我は知らなかったのだ。我は狭き世界で生きていたのだな。王城で当たり前に過ごしていた日々が、なんとも情けないことかと悔いる」

「ルキウス殿下はコタロを庇護^{ひご}していただろう？ それだけで精一杯だったのはわかるよ。あの魔王、人の話なんて聞かなそうだからな。白でも赤だと言いつつ」

そうに違いないと言いきると、ルキウス殿下は少し笑ってくれた。

コボルタ族は相変わらず新天地への興奮を隠さぬまま、散らばらないように気をつけながらもあちこちを散策している。大木の根っこを掘る者、木陰^{こかげ}で丸くなって数人で寝る者、火山に向かって祈る者など様々だ。

コタロとモモタ兄弟は何故か俺の膝を枕にして眠っているのだが、これが可愛いなのって。腹を天に向けて安心しきった顔して鼻をひくひく。しかし腹の虫は鳴っている。

早いところハヴェルマたちの集落に行つて、ごぼうサラダや肉を食わせてやりたい。コボルタ族のためならば、狩ってみせますモンスター。

「おう、タケル。ゾルダヌたち身体に魔石を埋め込んでいるやつには、絶対にこの地で魔法を使わせるなよ」

俺の頭の上で寝ころぶヘスタスが、俺の髪の毛を引っ張りながら改めて言う。

そもそもルキウス殿下たちに魔法を使うなと警告したのは、ヘスタスだった。

またもや守護精霊だの神の御使いだのとルキウス殿下たちは騒いだが、ヘスタスはそれを否定せず、^{あが}崇める敬えとドヤ顔。遠いお空に投げてやりたいこのイモムシ。

ヘスタスの言うことに信憑性^{しんぴやうせい}があったためか、ルキウス殿下は神妙な顔をして話を聞いてくれた。「ヤツらが埋め込んでいる魔石は魔素を吸収する力がええ弱い。まるで他から魔素を吸い込むことを拒^{こほ}んでいるようにも見える」

「ヘスタス、殿下たちの魔力が見えるのか？」

「俺は魔力の塊^{かたまり}だからな。多少の魔素の流れつてもんは見えるぞ。だから言えるんだが、アイツらが纏^{まと}う魔力はどうにも不自然だ」

「不自然で何。魔石を身体に埋め込める時点で不自然ではあるけども」

「なんてーかな。こう、もそもぞーっとしていて、ぶわわわーっとしたやつが、によるによるーって」

なにそれわからん。

ヘスタス曰^{いわ}く、マデウスに住む生き物は、誰しも魔力を纏^{まと}っているらしい。

魔力の大きさは種族や生物ごとで違うのだが、魔力ありきで生きているのが通常。基本目には見えないが、目に見える種族もいるらしい。身体の表面にうつすらと魔力を漂^{もよほ}せているものらしく、ヘスタスにはそれが見えると。オーラのようなものかな。

「普通のやつらは……おう、コボルタラが纏^{まと}う魔力は、一定の厚みがあるんだ。それが身体の表面を覆^{おほ}っているように見える。だが、ゾルダヌのやつらはその厚みが一定になっていねえ。どこかぼこぼこしていて、うつすらしていて、ぐによぐによしていやがる」

なるほどわからん。

コボルタラの魔力は一定にあつて、ゾルダヌの魔力は一定ではない。

纏^{まと}う魔力にも個性のようなものがあるのだろうか。だがしかし、ゾルダヌもハヴェルマもともとは同じ種族。ただ使える魔力の量が違うだけ。

抽象的かつ語彙^{ごい}力が不足しているヘスタスの表現はともかく、今この場所で魔法を使うのは禁止。ハヴェルマたちと合流^{ごうりゅう}して、いろいろと魔力に詳しいポトス爺さんに相談しよう。後で調査^{さきん}先生にルキウス殿下の魔石についてお伺いを立てるのもアリだな。

ルキウス殿下は優しい人だ。

ハヴェルマたちを追いやったゾルダヌではあるが、ゾルダヌの誰しもがハヴェルマを蔑^{あき}んでいるわけではない。少なくともルキウス殿下は身体に魔石を埋め込むことを恥じ、コボルタ族の境遇に嘆^{なげ}き、俺に助けを求めてくれた。

俺は、俺ができる範囲でできることをする。

そんなわけで、三度目の正直。三つ目の小石を利用し、今度こそうまくいけと強く願う。

いつの間にか起きていたコタロとモモタの熱い視線を感じつつ、ゆっくりと腹の中で魔力をこねこね。

焦らず、急がず、ゆっくりと。

俺たちはここにいますよと。

ゼン Gum たちに聞こえるように。

忘れていた言葉をふと思い出すような。

「淡き光、天に弾けて遠く響け……照明弾」リレリディオ

身体からぬるぬると魔力が抜ける。微かな魔力でも集めれば力となるのだと、ゼン Gum は言っていた。

俺の手の中に小さな光が作られた。手のひらをゆっくりと開くと、光はひよろりと空へ昇る。のぼ

ひゅるるる……ぱーんっ。

はい。

しょぼい。



だが、今までで一番大きな音と光を出せた。あれは立派な照明弾と言えるだろう。

弾け飛んだ魔石はキラキラと散っていく。コポルタ族たちは一斉に歓声を上げ、肉球拍手をぽふぽふ。

ルキウス殿下も嬉しそうに頷いてくれた。

後はゼングムが気づくのを待つだけなのだが、時間はどのくらい必要だろうか。などと考えていると、山の裾野から黒い何かが飛んでくる。

「タケルタケル、あれ、ゼングムじゃねえか？」

「痛い、そこで飛ぶな跳ねるな」

「ほれ見ろ、やつぱりゼングムの野郎だ！」

俺の頭の上に飛び跳ねるヘスタスが、俺と同じ方角を見て喜びはしゃぐ。

謎の飛行体に気づき始めたコポルタたちは、尻尾をピンと立てておのおの木の下へと隠れてしまった。

俺の背後に隠れたコポルタたちは数匹、いや数十匹。モモタくんや、俺の股の間に顔を埋めるのはおよしなさい。

ルキウス殿下は騎士らに護衛をされながらも、目を輝かせて飛行体を眺めていた。

次第に近づく黒い何かは大きな翼をはためかせ、ゆっくりと地面へと降り立った。

真っ白なナマハゲ……ヴルカに身を包んだゼングムは、ヘルメット部分を外して仰天顔を晒した。

相変わらず痩せてはいるが、初めて会った時よりかは健康そうだ。

「これは一体……滅んだと言われていたコポルタ族なのか？」

ビクビクと震えながらも尻尾をふりふり。コポルタたちは好奇心を隠さず、それでも警戒しつつ、近づくゼングムと距離を取る。

「ゼングム、気づいてくれて良かった」

「タケル！ やはりあの魔力はタケルのものだったか！」

へらりと笑って手を振る俺を見つけたゼングムは、背後に隠れているらしい隠れていないコポルタ族たちに笑顔向けながら手を振り返した。

「リコリスに攫われたお前をすぐに追ったのだが、転移魔法を使われてしまうと俺たちにはどうにもできない。すまなかった」

胡坐をかいたままの俺の前に来たゼングムは、深々と頭を下げた。

「仕方ない、仕方ない。俺も無意識に魔法で防御しようとしたから気絶したし」

「それな。ほんと使えねえよな」

ゼングムの頭を上げさせると、ヘスタスはそう言うて俺の頭の上からゼングムの頭の上へと飛び乗る。

「うるせえヘスタス。お前こそ何もしなかっただろうが」

「あん？ 俺はずっと起きて静かに状況を見守っていたんだ。感謝しろ」

「はいはい」

「感謝が足りねえ！ 酒をよこせ！」

「俺だって飲みたいわ！ 我儘わがまま言うな！」

「ふふふふ、お前たちは相変わらなずのようだな。安心した」

俺とヘスタスのくだらない口論に微笑むゼングム。

穏やかな雰囲気にな堵こしたのか、モモタが俺の股の間からゆっくりと顔を上げる。

「兄さま、兄さま、翼つばさのゾルダヌだよ」

「翼のゾルダヌはもつと怖い。きつとゾルダヌではないぞ。種族が違うのだ」

「しゅぞくがちがうの？ しゅぞくってなんだろうね」

「種族だ」

きつと小声でひそやかに話してるつもりなのだろうが、傍にいた俺たちにモモタとコタロの会話は筒抜けつつぬけで。

愛らしい兄弟の会話に和なごんだのか、警戒していたコボルタたちは一人、また一人と顔を出す。

先ほどまでの怯えはどこへやら。翼が生えたゼングムの姿が珍しいらしく、ゼングムの傍へわらわらと集まり始めた。

「タケル、彼らはどうしたのだ」

戸惑うゼングムに、俺が攫さらわれてからの経緯を話している暇は正直ない。

早いところこの場から離れ、腹を空すかせているだろうコボルタたちにごぼうサラダを食わせてやりたいのだ。

「王城の地下で強制労働をさせられていたんだ。あまりにも酷い環境だったから、ちよつと拉致してきた」

「はあ？」

「細かい説明は後ですから、まずは俺のことをハヴェルマの集落に……」

「ゼングム！」

大木の陰に隠れていたルキウス殿下が、護衛騎士の制止を振り払って飛び出した。

すぐさま警戒態勢を取るゼングム。

大きな翼を広げ、威嚇いかく。コボルタたちは素早い動きで俺に突進。いや、だから股の間に隠れようとするな。

「ゼングム！ 生き延びてくれたのだな！」

「……」

「わたしだ、ルキウスだ！ ルキウス・エルドフォルデ・プルシクムだ！」

涙を流して喜ぶルキウス殿下だったが、ゼングムは警戒を解かない。

むしろ、怒気どきを強めている感じだ。

婚約者との感動の再会にしては、ゼングムのおかしい。俺はコボルタたちの頭を撫でなが

らゼングムに問う。

「ゼングム？ どうしたんだ。お前の婚約者さんのルキウス殿下だぞ？」

「婚約者？ 俺に婚約者などいない」

「えっ」

ゼングムにぴしやりと言いつつ放たれ、ルキウス殿下が固まる。

わななくルキウス殿下の身体を支えながら、侍女のアルテが恐る恐る口を開いた。

「お兄様、わたくしを覚えてはおりませぬか？ アルテでございます」

「……」

「あ、貴方様の、妹でございます」

「何を言っている。俺に妹などいない」

ゼングムの否定の言葉にアルテの顔は青ざめた。ふるふると身体を震わせ、涙を流す。

「お兄様、わたくしの想像もつかぬ辛い思いをされたことでしょう。わたくしのことは、覚えておられなくても構いません。ですが、殿下のことを……貴方様の婚約者であらせられるルキウス殿下のことを否定するのはおやめくださいまし。それは、あまりにも……酷うございます」

アルテの懸命の訴えに多少警戒を解いたゼングムだったが、それでも顔を強張らせたまま。

「俺に妹も婚約者もいるはずがない。俺は幼き頃にハヴェルマの烙印を押され、ずっとポトス爺に育てられたのだから」

「そのようなこと！ 違います、お兄様！ お兄様はれっきとしたエルディバイド次期当主であらせられます！ 父も母も健在でございます！」

「嘘をつくなゾルダヌ！ 俺はお前など知らん！」

どういふことなの。

ゼングムは天涯孤独のハヴェルマ。それは知っている。魔力が少なかったため、親から見放されてしまった。普通なら両親から教わる魔法も、ポトス爺さんに教えてもらったと言っていた。

だがアルテが嘘をついているとも思えない。あの必死さと、よくよく見ればゼングムに似た面立ち。ルキウス殿下にいたっては王女様だ。ハヴェルマであるゼングムの婚約者などと、冗談でも言えないだろう。

「ゼングム、ゼングム、俺はラトロだ。覚えてるか？ 騎士学校でお前と席を並べた」

「……知らん。俺は騎士学校に通った覚えなどない」

護衛の一人が名乗ったが、それにもゼングムは否定。

警戒を露わに、再び翼を広げて威嚇している。

コボルタたちは不安でおろおろと狼狽しているし、ヘスタスは訳がわからんと俺の頭皮を引っ張る。

誰の言い分が正しいのかなんて、完全に部外者である俺にわかるはずもなく。さてどうしたものかと。

空を見上げた。

＋ ＋ ＋ ＋

ゼングムとルキウス殿下たちの口論は長くは続かず、モモタのどかい腹の虫によって強制終了。魔族の事情を知らない俺は、どちらかの言い分だけを鵜呑みにするわけにはいかない。だが腹は空くし喉は渇く。

俺とヘスタスは警戒するゼングムにひとまずここから移動させてくれと頼み込み、なんとか聞き入れてもらった。

ハヴェルマがゾルダヌを助ける前例はない。だが疲弊したコボルタ族たちを見放すこともできないゼングムに、俺とヘスタスだけハヴェルマの集落に運んでもらうことにした。

魔石をいくつか失敬し、この場で地点を固定する。大勢でぞろぞろと移動するよりも、魔石は大量に消費するが転移門を展開したほうが安全かつ確実。

ハヴェルマの集落に到着したら、ヘスタスには俺が転移門を作る間にこれまでの事情を説明してもらう。鋼鉄の守護精霊様の話なら彼らも耳を傾けてくれるだろう。

ハヴェルマの集落に到着した俺とヘスタス。ポトス爺さんはじめ大勢が出迎えてくれた。中には喜びのあまり俺に飛びつく子供たちも。皆無事なようで良かった。

ありがとうありがとうと頭を下げつつ、皆に離れるようお願いしながら持ってきた魔石を抱えて広場に移動。ミスリル魔鉱石に比べると魔素含有量が少ない魔石だから、あまり長いこと転移門を維持するのは難しいだろう。魔素が豊富にあったゾルダヌの本拠地はともかく、ここは魔素が少ないのだから。

「なんだと!？」

俺の背後でポトス爺さんの叫び声が聞こえたが、作業に集中。

ハヴェルマの集落に来る直前、置いていかれるのではないかと泣き叫んで俺から離れようとしたかったコタロとモモタ兄弟を思い出し、必死に魔力を練る。

時間との闘いだ。

ぱぱっと開いて、ちゃちゃっと移動して、ガツと閉じる。目標、拳大の魔石五個使用。

光る門ができたらしに飛び込めと言っている。ルキウス殿下は俺の説明に驚きつつも深く頷き、哀しそうな顔でゼングムを見つめていた。

焦がれていた婚約者との再会だというのに、記憶にないとか覚えがないとか、さすがに酷いんじゃないかと思った。ゼングムがどれだけの苦勞をしてきたのかはわからないが、婚約者や妹のことを知らないはずがない。かといって、ゼングムが嘘を言っているようには見えない。

あれかな。

過酷な体験のせいで記憶を失うとか、そういうやつだろうか。ゼングムと知り合ってわずかだが、